

國學院大學学術情報リポジトリ

〔講演録〕 子供の本棚：児童文学全集が展く世界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 日奈子, Abe, Hinako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000734

〔講演録〕

子供の本棚 ——児童文学全集が展く世界

國學院大學渋谷キャンパス6号館B21教室

2022年12月10日（土）15時30分～17時

講演・資料作成 阿部日奈子

司会・概要執筆 笠間直穂子

『植民市の地形』（七月堂、1990年、歷程新鋭賞）から『海曜日の女たち』（書肆山田、2002年、高見順賞）を経て、最新作の『素晴らしい低空飛行』（書肆山田、2019年）まで、壮麗と酷薄、生身と理知が表裏一体をなす作品世界を切り拓いてきた詩人の阿部日奈子氏【図1】は、久生十蘭や日影丈吉の文庫本解説を手がけ、鋭利な書評をものする無類の読書家でもある。このたび、30年にわたり紡いできた書評から選りすぐりの59篇をまとめた『野の書物』（インスクリプト、2022年）の刊行を機に、本書中でも言及される、幼少時の氏を魅了した創元社／東京創元社（刊行中に改組）の「世界少年少女文学全集」（1953-1958年）を軸に、子供の世界観に大きな影響をあたえ、また創作の原点ともなる読書の営みをめぐってお話いただいた。



【図1】阿部日奈子氏

新型コロナウイルス流行に伴う措置として、定員30名の事前申込制としたところ、当日の参加者はほぼ上限の29名となった。阿部氏の「本ともだち」にあたる幾人かの参加者が、講演中に阿部氏の呼びかけで対話に加わる場面もあり、本について語り合うことを大切にする氏らしい、温かな時間となった。

講演にあたり、阿部氏からは本全集全巻の詳細な総目次が当日の配付資料として提供された。書誌学的にも貴重な仕事であるため、本講演録に付す【附録1】。また、講演の最後に朗読していただいた自作詩「小さな李の靴」も併せて収める（当日配付したペネロピ・レイランド、菊地利奈両氏による英語訳は紙幅の都合により割愛する）【附録2】。

（笠間直穂子）

子供とはいつからいつまでか

子供の本について話すときに、「子供」というのは一体いつ頃からいつ頃までなのか、特に本との関わりで言うとうどうなのか、それを最初に考えてみました。

誰でもそうですが、だいたい1歳くらいで、かなりの言葉がわかるようになります。親に絵本を読んでもらえば、子供なりに理解し、想像もすれば面白がりもし、現実と絵本の世界の境目がなくなるほど没入したりもするでしょう。しかしまだその頃は文字を読むことはできません。無文字社会に生きる子供にとって、音声と意味が組み合わされて、言葉の獲得がなされる時期ではないかと思います。

亡くなった中井久夫さんが『「昭和」を送る』（みすず書房、2013年）の中で、1歳から3歳までの子供の知能の発達は非常に速い、一日に150語くらいの新しい言葉を覚える時期があると書いています。一日に150語というのは、いくら何でも大げさではないかと思いますが、確かに脳がフル回転して、音声と意味がどんどん結びついていく時期ではあるでしょう。

この頃の子供は繰り返しが好きで、同じ本を親に何度も読んでもらいます。私も子供の頃に『シンデレラ』とか『浦島太郎』とか『ジャックと豆の木』とか『桃太郎』とか、昔話の類いを読んでもらいましたが、いちばん好きだったのは『ぞうのババール』という絵本でした。記憶にはありませんが、一日に20回くらい読ませたと聞いています。それくらい読ませていたので、頭の中ではおそらく全文を覚えているような状態だったと思います。まだ口はすらすらとは動かないので、自分からそれを人に話したりはしませんでしたけれども、全てを覚えていて、読み手が変わって少しイントネーションが違くと「あれ？」とすぐに気付くほどに、ほとんど暗記していたはずです。

いつまでも親に20回も読ませるわけにはいかないし、自分で本が読みたくなって、だんだん文字を覚えていく。それが4歳から小学校に上がるくらいまでの、無文字社会を脱しかけた、字よりも絵が多い本を読んでいる時期の子供ではないかと思います。

小学校に上がると、今度は絵よりも字が主体の本を読むことになります。その時期に私が出会ったのが今日の話題の中心になる創元社の「世界少年少女文学全集」ですが、それについては後で話すとして、もう少し先まで子供と本の間関係をたどりましょう。

私の小学生時代には、大手出版社から児童文学全集の刊行が相次ぎ、そうした全集や岩波の少年文庫などを読んでいました。それが中学生になると、文庫本を読むようになります。大人と同じ本を読むことになるわけですが、どこまで理解しているか、じつは怪しい。私も中学生になって文庫本で谷崎潤一郎『蓼喰う虫』などを読むようになるのですが、たとえば〈夫婦関係のない夫婦〉という間柄に

生じる気詰まりややるせなさを読み取っていたかといえ、半分もわかってはいなかったでしょう。

それでも中学に入ると、学校ではなく街なかの図書館に通うようになり、古本屋へも行くようになります。本の背表紙を見るだけで楽しく、読書範囲はぐっと広がりました。

高校生になると今度は文芸誌を読むようになります。フィクションを楽しむだけでなく、最先端で書かれているものに関心が向き、文学理論のようなことにも興味が出てきて、それまでの感想文ではなく一種の批評のようなものを考え始める。それが高校生時代だと思います。

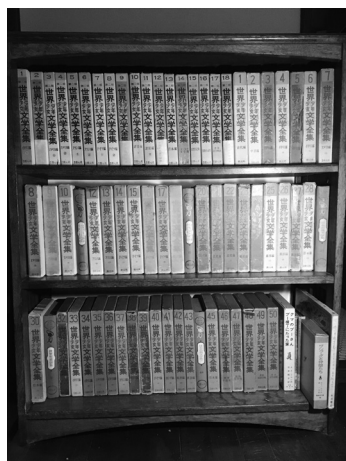
つまり読書という分野では、高校生はもうほとんど大人でしょう。十代後半の時期は、知識も体験もまだ足りてはいないけれど、しかし感覚的には大人よりもずっと鋭敏なアンテナを備えている。それによって、これからの新しい潮流や、自分にとって最も大事なものをつかまえる時期でもあります。

高校生が大人だとすると、絵本を読み始めてから中学校に入るくらいまでが、純粋な意味での子供の読書ということになりそうです。本日は、ほぼ小学校の6年間に重なるその時期を中心に、お話ししたいと思います。

創元社「世界少年少女文学全集」の概要（気になる作品を挙げつつ）

創元社の「世界少年少女文学全集」の話に入ります。今年出した書評集『野の書物』にも書きましたので、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、その全集は、私が小学校2年生のときに仲良くなった同級生の女の子の家のものでした。近所同士で、歩いて5分もかからないその子の家に遊びに行くと、廊下の隅に、私が見たことのない文学全集が並んでいました。この写真は現在の私の家の本棚を撮ったもので【図2】、並んでいるのは大人になってから古本屋で買い揃えた全集ですが、ほとんどこれと同じ感じで、かつての同級生の家の本棚に、全68巻がきちんと納められていたのです。

その頃、私の家では、刊行が始まった講談社の「少年少女世界文学全集」を揃えているところでした。えんじ色の表紙の本で、私の年代の人たちにとっては、それが最もポピュラーな児童文学全集ではないかと思



【図2】創元社／東京創元社
「世界少年少女文学全集」

います。創元社版はそれよりも明らかに古く、紙質などもずいぶん違っていて、聞けば年の離れたお兄さんの蔵書とのこと。見せてもらうと、収録作品が講談社の全集よりも凝っていて、面白そうです。家が近かったこともあり、それからは借りてきては読んで、また返して次の本を借りるということを繰り返して、とうとう68巻を読み通してしまいました。

2年生のときに同じクラスになってからクラス替えは何度もありましたが、その子と6年生までずっといっしょだったのは、今から思えばとても幸福なことでした。

ではこれから、私がこの全集の中で特に気になった本をあれこれ、配布したリストに沿って挙げてみます【附録1】。本の話のあいだにリストを見回して、この全集の概要をつかんでいただけたら幸いです。全体を見渡してから、この全集の特長や意義について、お話ししたいと思います。

第1部の第1期は32冊、第2期が18冊で、合計50冊です。それから第2部がありますが、これが18冊ですので、全部で68巻となります。この68巻は1953年から58年までの5年間で、全巻刊行されています。一巻が380円というのは、当時としては決して安い値段ではなかったと思われます。

第1部は第1期、第2期とも責任編集が阿部知二、川端康成、高橋健二、坪田譲治、豊島与志雄、米川正夫という方々です。このうち豊島与志雄は1955年に亡くなっているのですが、第2部の責任編集には入っていませんが、あとは第1部と全く同じ顔ぶれです。また今回、全巻を見直して気づいたのですが、編集委員のほかに、この全集に大きく貢献した人として、詩歌では野上彰、ほかに神話学の松村武雄の名前が挙げられるのではないかと思います。

装幀はすべて初山滋です。1955年、第2部刊行に先駆けて作成された予約募集のパンフレットによると、この全集は戦前にあった美しい本に負けられないような装幀を目指してつくられたとのこと。実際、今ではもうすっかり古びてしまいましたが、当時としてはとてもしゃれたつくりだったことでしょう。



【図3】第1巻と第68巻

第1巻と最後の第68巻の画像をお見せします【図3】。第1部はピンクの表紙で、第2部はブルーの表紙です。手許にあるのは図書館の本で少し汚れているのですが、実物を回覧しながら、ここからは内容についてお話ししたいと思います。

私がどのような話に惹かれたかと言いますと、まずは第1巻(古代編)『ホーマー物語』の「イーリアス」です。呉茂一の翻訳で、終盤の、ア

キレウスとヘクトールの決闘の場面に、すごく感激しました。

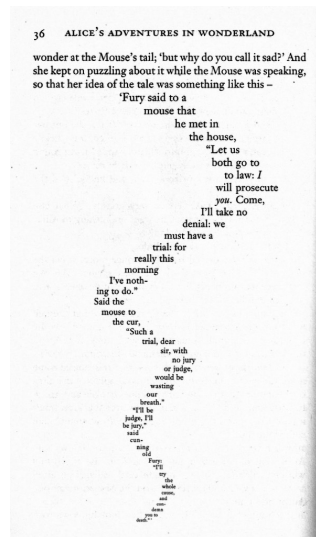
ヘクトールは、背後に弟が控えていることに力を得て、アキレウスに向かっていきます。ところが背後にいたと思った弟は、じつは弟に化けた女神アテーナーで、弟のふりをしていたのです。槍が折れたヘクトールが、新しい槍を受け取ろうとして振り返ると、弟はいません。その途端にヘクトールは、神は自分の味方をしていない、この戦において神は自分の側には付いていないということを悟ります。それはつまり死の宣告であり、自分の命はここまでだと覚悟するわけです。

まずそのことで、子供だった私は、そうか、ギリシャ人はそういうふうな運命を考えたのだと思いました。でも、そのときに、ヘクトールは絶望してそこにしゃがみ込んでしまうのではなく、槍がないのだったらばと、腰の剣を抜いてアキレウスに躍りかかってゆく。それでも結局、アキレウスの槍の一閃で倒されてしまうのですけれど、神から見放され自分の死期を悟っても、人間として最後まで戦うのだというその姿勢に強く打たれました。

第5巻（イギリス編3）の『宝島』も大好きな物語です。宝島の地図に見入り、海賊たちの不吉な歌〈七十五人で船出をしたが、生き残ったはただひとり〉に震え上がりました。さらに夢中になったのは第六巻（イギリス編4）の『ふしぎの国のアリス』です。吉田健一の翻訳で、絵は原書のジョン・テニエルでした。テニエルの絵は日本人の描く挿絵と全然違います。日本の挿絵は余白を生かして風情を出しているのですが、『アリス』の絵はまるで逆。端の端までまごまごと描き込んでいることに、強烈な印象を受けました。

この講演の打ち合わせのときに、笠間直穂子さんと話していましたら、笠間さんは小学生の頃にスイスで育っているのので、『アリス』も英語で読んでいたと伺いました。そのことを少しお話いただけますか。

笠間 私は子供のときに読んだ本の話をするときに、日本で育った皆が知っているものでも、私の知らないものがたくさんあります。それは6歳から10歳までスイスのインターナショナルスクールに通っていて、そこにある英語の本を読んでいたからです。それで子供の頃にとっても印象深かったのが、『ふしぎの国のアリス』の中のネズミの話です【図4】。私は言葉遊びのある話が好きだったの



【図4】ネズミの話（Lewis Carroll, *The Adventures of Alice in Wonderland*, 1866, p.36 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Alice_in_Wonderland_Ch.3.jpg])

で、これを見たときも、物語のtaleと尻尾のtailが同じ音だから、tailの形をしたtaleを書くというのが、ものすごく面白いと思って、忘れられませんでした。

のちに、これが日本語に訳されていると知ったときに、無理ではないかと思いました。どうすればこれを訳せるのかと思った覚えもあります。ということは、言葉遊びの面白さは、その言語固有の面白さだということを、当時も意識していたのではないかなと思っています。

私はもちろん、吉田健一の翻訳で読むことができたのを後悔してはいませんが、今のお話を聞くと、うらやましいような気がします。今日いらしている方でもうお一方、美術史家の金沢百枝さんも、インドとイギリスで子供時代を過ごしているので、そのときに読んでいた本の話をしていただけたらと思います。

金沢 私は4歳から10歳までインドにいました。家の中では日本語で話していましたが、家で働いていた人はインド人とネパール人で、乳母もネパール人でしたので、ネパール語とヒンディー語と英語と日本語をごちゃまぜにしながら過ごしていました。

小学校は日本人が少なく、全校生徒で20数名という、寺子屋のようなところでした。学校は家のようなところで、図書館には先ほどのような全集のほかにも、さまざまな方が置いていったとても古いもの、『のらくろ』や『サスケ』などのマンガもいろいろありました。私たちの世代が普通は読まないようなものも置いてありました。

記憶にととても残っているのは、『ネズミの花嫁』という物語です。『パンチャタントラ』というインドの物語集の中に入っているものですが、日本の昔話の中にも同じ物語があるようです。ネズミのお父さんが自分の娘を一番強い者と結婚させたいということで、太陽と結婚させようと言いますが、太陽は雲で陰るのでやはり雲と結婚させようという感じで話が進み、結局のところネズミと結婚させるという話です。インドの言葉で読んで、インドの絵本で見たはずなのに、日本に帰ってきて同じ物語を見る、ということにとても驚きました。

私はその頃話していたネパール語もヒンディー語も完全に忘れていたのですが、最近、インド映画（踊らないインド映画です）にはまっています。それで、インド映画を見ていたら、言葉を思い出したのです。思い出すものなのだと驚きました。イヌとかネコという単語を思い出しました。ネコという単語が出てきたことをきっかけに、あ、イヌはこれだというような、ヘレン・ケラーのような感じで次々と単語を思い出していきました。子供のときの言語感覚とは何だろう、不思議だなと思いました。

ありがとうございました。金沢百枝さんはインド時代のことを、新聞連載のエッセーにも書いていらっしゃいます。日本ではお正月に獅子舞が門付けに来ますが、それと同じように、インドでは象を連れた人が家に来て、子供を象に乗せてくれるのだとか。子供の目に映るインドの光景を手繰り寄せるように綴ったエッセー

で、とても面白く読みました。ご専門の西洋美術史だけではなく、インド時代、子供の頃の話をつか本にさせていただきたいと、私は願っています。

リストの先に進みます。同じ第6巻に『ピーター・パン』が入っています。日本で言う『ピーター・パン』は、ピーター・パンとウェンディの『ピーター・パン』ですが、ここで訳されているのは、「ケンジントン公園のピーター・パン」のほうです。赤ん坊の身で窓から逃げだし、ケンジントン公園で遊ぶピーターの話。家へ帰ろうとしたときには、母親の腕にはすでに別の赤ん坊が抱かれ、ピーターは公園へ引き返します。ユーモラスな語り口の底から、永遠の子供として生きることになったピーターの孤独が伝わってきて、何とも言えない気持ちになりました。フック船長と戦うピーター・パンとは大違い。こうした作品選定からも、この全集の編集方針は他社のものとはひと味違うということを子供心に感じました。

第10巻（アメリカ編4）では『子じか物語』がとても好きです。読んだときに、アメリカの文学はヨーロッパとは少し違う、という気がしました。スタインベックなどもそうですが、生活を描いている、しかもとても貧しい開拓者たちをリアリスティックに描くのがアメリカの文学なのかな、と思いました。原題は“The Yearling”（一年子）、産まれて一年の子鹿の野生への目ざめと、子鹿にとどめを刺す少年ジョディの試練を重ね合わせたタイトルです。ここには、ピーター・パンとは逆に、生活者として大人にならざるをえない子供の苦しみがあります。1946年の名画『子鹿物語』に感動した方は、ぜひ小説も読んでみてください。父ペニの言葉に重みがあります。

第11巻（フランス編1）、渡辺一夫訳の『ガルガンチュアとパンタグリユエルの物語』は、突拍子もない話。巨漢で大食漢で大酒飲みものとなんでもない主人公が出てきて、スカトロジー、糞尿譚から戦争までさまざまな乱痴気や狼藉を繰り広げます。「うーん」と唸って目を白黒させながら読みました。しかし読むうちに、もっともらしい宗教者や偉ぶった権力者をからかう批判の書であることがわかり、想像の翼を駆った痛快譚と思えてくる。何たる大風呂敷、何たる奔放！ しかもギュスターヴ・ドレの挿絵が、先のテニエルの挿絵同様、ものすごく緻密で、これぞラブレの世界と思わされます。

第13巻（フランス編3）の『風車小屋だより』には、「スガンさんのやぎ」という話がありました。若い雌やぎのブランケットが山の中に逃げていって自由を満喫するのですが、夜になると狼が出てきて、戦うことになります。ブランケットの戦いぶりがとてもけなげなのです。一生懸命小さな角をふり立てて狼に身がまえ、きっとここで死んでしまうのだと思いながらも、自分だってスガンさんの家の勇ましいやぎだとばかり、ぶつかっていきます。戦いのあいまにちょっとでも隙ができると、そのあたりにある好物の草をむしゃむしゃとはおぼって元気を出し、夜が明けるまでは絶対に負けずと持ち堪えるのです。先ほどのヘクトールの話のように、死ぬことはわかっている、最後まで戦い夜明けを待って斃れ

た雌ヤギの勇氣に感動して泣いてしまいました。

また『風車小屋だより』の中には「金の腦みそを持った男」という話もありました。金の腦みそを持って生まれてきたために、親にまで頭を割られて腦みそを取られ、付き合う人たちにも騙される男が主人公。最後、とても好きだった女の子が死んだのち、腦みそが減ってその子が死んだことすら忘れてしまった男は、ある靴屋の前を通りかかってショーウィンドーに白鳥の羽毛で飾った青い繻子の靴があるのを見て、これをあの子に買ってやればどんなに喜ぶだろう、と思います。男はその繻子の靴を片手にさげ、自分の頭の中からほとんど残っていない金の腦みそを爪でこそげ取って、靴屋に入っていきます。苦しうに売り台に寄り掛かり、金の削り屑をつけた指先を差し出す男、恐ろしさに後ずさりする靴屋のおかみさん……哀切極まる最後の場面が胸に焼き付きました。

第14巻（ドイツ編1）にはハウフ『隊商』、第15巻（ドイツ編2）にはホフマンの『くるみわり人形』があります。そのときはまだドイツロマン派という言葉も知らなかったのですが、夢想的な夜の抒情を感じ、明晰なフランスと陰翳のあるドイツの話はやはり違うのだなあと思いました。

リストの先へ行きますと、いよいよロシアの巻が始まります。ロシアの巻には、トルストイもドストエフスキイもチャーホフも出てきますが、子供だった私がいちばん感動したのは第20巻（ロシア編3）の『石の花』です。みなし子のダニールシコが石工の親方の元に預けられます。最初はしぶい顔をしていた親方ですが、くじゃく石細工の才能がダニールシコにあることに気づき、すっかりかわいくなって自分の技をすべてこの弟子に伝授してやろうと思い定めます。ダニールシコも親方になつて、村の娘カーチャと婚約するのですが、ダニールシコには天才の悩みがありました。つくっているものを皆がどれほど評価してくれても、自分では満足できません。石に生命を与えるような作品をつくるためには、山に住んでいる女王さまのところに行かなければならないと思い込み、カーチャとの婚礼の晩に失踪してしまいます。

カーチャは捨てられた女として村中から哀れまれ、また村の男たちが、ダニールシコはもう帰ってこないのだから自分たちの相手をしろと言って、押しかけってきます。しかし、このカーチャがすごいのです。彼女はなんと石工の親方のところに弟子入ります。女になど務まるわけがないと言われながら、くじゃく石の細工を一心に学びます。もちろんダニールシコほどの天才ではありませんが、一流の品を作れるようになります。しかも、親方は徐々に年老いて弱っていき、カーチャは老人を看取ったあと、一人で山に向かい、ついにダニールシコを連れ戻して夫婦になるという話です。

私はここで、ただ待つだけの女ではないカーチャにとっても惹かれました。そもそ小さい頃に読んだ『シンデレラ』などに、何かおかしいという気がしていました。王子さまがプロポーズしたからといって、それをありがたく受けなくては

ならないのか、断るとどうなるのか、と考えていたので、カーチャが自分で自分の道を切り開いていったところに、胸のすく思いがしました。

なお『シンデレラ』については、後年、シンデレラの継母を語り手とする「小さな李の靴」という批判的な詩を書きました（当日は講演の最後に本作を朗読した【附録2】）。

第24巻（南欧編2）には『クオレ』があります。講談社の「少年少女世界文学全集」にも『クオレ』はあったので、両方を比べてみました。『クオレ』では、先生が生徒に「まい月のお話」をしてくれます。皆さんもよくご存じの「母をたずねて三千里」（創元社版では「アペニン山脈からアンデス山脈まで」）なども「まい月のお話」の一つですけれども、講談社版では「毎月のお話」がいくつか省略されたのに対し、創元社版は全てを載せていました。「まい月のお話」を全話読むことによって、当時のイタリア人の郷土愛を感じとれたように思います。

第25巻（東洋編1）は「アイス童話集」から始まり、朝鮮、蒙古、中国、ビルマ、台湾、フィリピン、南洋諸島、インド、ペルシアと各国の童話集を経て「トルコ童話集」まで行きます。東洋の西の果てはトルコなのだったと思った一冊です。

第29巻（日本編2）は古典文学集。『古事記物語』から『雨月物語』まで9編を収録、そのうち『竹取物語』は川端康成訳です。子供の頃はそもそも古文というものを知らないで、目の前の物語が古典の現代語訳であることを意識せずに読んでいました。いちばん面白かったのは『堤中納言物語』の「虫めずる姫君」で、尻切れとんぼの終わり方が今も気になっています。

第31巻（世界児童劇集）は戯曲集で、『ピーター・パン』ほか5編。劇のほうの『ピーター・パン』はピーター・パンとウェンディのお話なので、第6巻の「ケンジントン公園のピーター・パン」と合わせて、両方を読むことができるわけです。

第32巻（世界童謡集）では、『マザア グウス』をはじめ世界各地の童謡が、一部は譜面付きで紹介されています。先ほど笠間直穂子さんのお話にあった原文での言葉遊びの面白さを、できるかぎり伝えようと工夫された翻訳と思われ、訳者は野上彰、西条八十、三好達治、神西清、金素雲などなど。

第34巻（イギリス編6）には『宇宙戦争』が入っていて、夢中になって読みました。著者のH・G・ウェルズは、今、皆さんのお手元を回っている最終巻『世界文化史物語』も書いています。SFの祖が、世界史を見晴るかす文明批評の人でもあることに、畏敬の念を抱きました。

第36巻（アメリカ編6）に収録の『あしながおじさん』。ここまで私は自分が気に入った作品について話してきましたが、これは、先ほどの『シンデレラ』と同じく「えっ？」と疑問を覚えた小説です。孤児院で育ったジューディが、篤志家からの資金援助によって大学に進学しますが、スポンサーが誰なのかはわかりません。条件として、その人宛てに大学生活を報告することになっており、ジューディはウィットに富んだ手紙を綴ります。手紙の中には、付き合うことになった

ジャーヴィーという青年も登場。ジャーヴィーは良い家柄のお坊ちゃまだし、私は孤児院にいたことを打ち明けていないし、彼との結婚は無理、だから私はおことわりしました、というようなことを書くわけです。ところが最終的には、手紙の受け手の篤志家がジャーヴィーその人だったということがわかって、めでたしめでたし。しかし、これってめでたいのだろうか、と私は思いました。

だって、とても不均衡ではないですか。ジューディは相手のことを知らずに自分の日常を書き送っていますが、先方はジューディの心の内まで把握している。これほど不公平なことがあっていいのかと思い、嫌な感じがしました。『あしながおじさん』は、どの児童文学全集にも採られている作品で、手紙の生き生きした文章や著者本人が描いたイラストの面白さは認めるとしても、終わりよければすべてよし、にはしたくありません。

第41巻(ロシア編4)に『森のほのお』というロシアの話があり、ソヴィエトとナチス・ドイツが戦った大祖国戦争時代の子供のレジスタンスを描いているのですが、別の作品と関連づけて話したいので、これは後に回します。

第46巻(推理小説集)あたりからは国別ではなく、各巻が推理小説、動物文学、探検紀行、伝記文学などジャンル別のアンソロジーになっています。本にはジャンルというものがあり、同ジャンルの作品を集めれば、一つの世界を形づくれるのだということを強く意識しました。第48巻(世界探検紀行集)の『アラビアのロレンス』については、のちほど改めて触れたいと思います。

第1部の最後、第50巻(世界名作劇集)で、宮沢賢治の『飢餓陣営』に出会いました。花巻農学校で教えていた賢治が、生徒のために書いた戯曲の一つで、この巻の解説では「大正12年、13年に学芸会で上演」とあります。飢餓に瀕した敗走の陣営で、バナナン大將が生産体操を發明し兵卒たちにやらせると、天から果実が降り注いで全員が飢えを癒し歌いながら行進するという、ある種の共同幻想譚です。台詞も歌も果樹整枝法を舞踊化した生産体操も、すべてが詩的で素晴らしい！感動しました。

しかし、戯曲が書かれて20数年が経ったとき、太平洋戦争でニューギニアなど南方に送られた兵隊たちには、撤退戦でジャングルをさ迷う、まさに飢餓陣営そのものの状況が待ちうけていました。毎年8月15日頃になると、新聞で戦争の体験特集がありますが、ある年、南方に行っていた人からの投稿がありました。死期が近い兵隊でも何とか皆で逃げようということで、重傷者を抱えながら部隊が撤退しているときに、すでに意識もおぼろになった兵隊が、目の前の水たまりの中に手を突っ込んで泥まんじゅうをつくって口に入れ、「あんころ餅だ。みんなも食べろ」と呼びかけるのです。投稿者は止めようとするのですが、上官は「いや、放っておけ。あいつはもうじき死ぬのだから、幻想でも食べているつもりであれば、そのままにしておけ」とそれを制した、という記事でした。骨と皮に痩せながら、仲間にも食べろと勧める兵隊、これは現実の飢餓陣営だと、投稿を読

みながら思いました。

ここから第2部に入ります。まず第3巻（アメリカ編1）の『リーマスおじさん』。ジョエル・チャンドラー・ハリスという人の作品で、黒人英語で書かれた物語です。ハリス自身は白人ですが、南北戦争前のジョージア州で最下層の貧しい家に生まれ、周りの黒人たちと親しく交わって育った人だそうです。職を転々としたハリスでしたが、1876年に28歳でアトランタの新聞社に雇われると、辞めた記者のピンチヒッターでコラムを連載することになり、そのときに黒人英語で書いてみたところ、評判に。それが出版され『リーマスおじさん』シリーズが生まれました。

この巻のあとがきによると、『リーマスおじさん』シリーズは、文法も語彙も綴りも、普通の英語とはずいぶん違う黒人英語で書かれているので、本来はそのように訳さなければならないのだけれども、それは難しいとのこと。リーマスおじさんが、代々仕えている家の主人や、その坊ちゃんに話している内容は訳せても、口調は伝えられなかったそうです。『リーマスおじさん』シリーズは、アメリカで黒人文学を研究する人たちにとって必読書になっている、とも書かれています。訳者あとがきによって、一国の中に違った位相の言葉が重層的にあること、その翻訳が難しいことに思い至りました。

第7巻（ドイツ編1）のルイーゼ・リンザー『波紋』は、全集中もっとも好きな作品なのですが、『野の書物』に書きましたので、ここでは省略いたします。第9巻（ロシア編）の『若き親衛隊』も、先に触れた『森のほのお』と並べて考えたいので、後に回すことにします。

第10巻、第11巻（諸国編1、2）は、ハンガリー、フィンランド、チェコ、ブルガリア、ポーランドなど、中欧や東欧の国々の作品です。その中で私は『パール街の少年団』と『ほんとうの空色』が好きなのですが、どちらもハンガリーの作家の作品で、二作とも新訳が出ていますから、長く読み継がれているのでしょう。

もう一つポーランドのボレスラフ・プルス『少女アネーリカ』という作品があります。リストでは全集に合わせてボレスラフと表記しましたが、どうやら今はボレスワフと書くようです。本日はプルの長編小説『人形』をお訳しになった関口時正さんがいらっしゃるので、作家プルスについてお話しいただけるでしょうか。

関口 『少女アネーリカ』は面白かったですか。

いえ、正直に言えば面白くはありませんでした。没落貴族の話で、お父さんがだらしない人なのですね。ロシア文学の『桜の園』や『オブローモフ』にも出てきそうな荘園領主で、経営能力のなさから、荘園を人手に渡さざるをえなくなる。そのようにして没落してしまって、長女であるアネーリカも結局死んでしまうと

いう、たいへん悲惨な話でした。

関口 ボレスラフが今になってボレスワフになったのではなく、以前からボレスワフなのですが、小沼文彦さんはこれをロシア語から訳しているために、ボレスラフとなっています。

今、阿部さんの『リーマスおじさん』の話を聞いていて思い出したのですが、『アネーリカ』の原文でたぶん私が訳せないだろうと思うのは、農民や使用人たちの言葉で、簡単に言えば方言です。規範的なポーランド語ではありません。お館さま、つまり荘園領主はポーランド語を話しています。英訳やフランス語訳などを見ると、多くの翻訳ではその差を無視しています。しかし、これは大きな間違いです。間違いだけでも目をつぶって、子供のために紹介する良い教訓話として訳すかどうか、悩ましいところですけども。

この物語はロシア帝国領の話です。先ほど阿部さんが紹介されたように、没落する貴族の話で、1880年代のポーランドでは農奴解放がありました。よく読むと、背景に農奴解放をせざるをえない、支配者階級であるポーランド人と、小作人たち、つまり土地を自分のものにして自作農になりたいという人がある。ヨーロッパで最も遅れた農奴解放がロシアでついに始まった頃の話です。その犠牲になるのは子供たちや奥さんです。

今回、この原文を再度読みましたが、こういうものが子供のため、少年少女のための文学全集に入るのかと感じました。こういうもの、というのが何なのかについては、大きな議論になるので話しませんけれども。またもう一つ、キリスト教の扱いがあります。阿部さんはそれをどのように捉えているのかなと思いました。

先ほど外国で育った方々の話がありましたが、私たちの頃は、多くの場合は子供時代に外国の文学や物語を読んで外国のことを学ぶというプロセスがあったわけですね。今は違うようですが。私は今、外国文学の翻訳をしています。日本語を母語とする読者には、妄想された外国との間にギャップがあり、そのギャップはときに危ないこともあって、信用が置けない面もある。それから宗教に関する理解もあります。この作品は子供のための話ですが、背後には革命や農奴解放、階級差、闘争などがあって……。読みながら、どうなのかなと考えました。ただ、文学作品としての価値を言うことは難しいですが、ポーランドでは、この作品が必ずしもブルスという作家の中で読むべきもの、教科書にも載っているもの、ということはありません。

それはわかります。ただ、没落して荘園を手放す相手がドイツ人だということに、もしかするとポーランドの当時の歴史が見えてくるのでしょうか。

関口 少しはあるでしょうね。

ありがとうございました。歴史や時代と文学の関係については、のちほど、この全集の特長を考える段で、改めてお話ししたいと思います。

第13巻（日本編）には、日本の児童向け現代小説として吉屋信子、川端康成、阿部知二の作品が採られています。私は川端康成の『万葉姉妹』を面白く読んだのですが、その後、これは川端の著作ではなく、佐藤碧子が代作しているのではないかとされるようになりました。ただ『万葉姉妹』は、姉妹ではあっても別々の環境で育った二人が出会う話ですから、この作品が書かれた約10年後に、川端が『古都』で描いたシチュエーションと同じです。ですから代筆はあったとしても、そもそもの構想自体は川端ではないかと私は思うのですが。

最後の第18巻が、先ほど皆さんに回覧した、H・G・ウェルズの『世界文化史物語』です。これを最後に置く編集からも、この全集が歴史を意識していることが感じられます。全集がスタートしたのは、戦争が終わって10年もたたない1953年ですから、戦争への反省もあったでしょう。

ウェルズの『世界文化史物語』の中には、日本のこともかなりきちんと書かれています。明治の開国以降、急速に世界に追いついてきたものの、日本は世界について全部はわかってはいない、と。わかっていない状況で、日清日露戦争に勝利したことによって、とても奇妙な精神状態にあった。そのことの非常な危うさを、日本の優れた政治家は認識していたかもしれないが、国民一般は、得たような気持ちになった力に酔っていた、と書かれています。第二次世界大戦時、普通の日本人は好戦的ではなかったのに、軍部に引っ張られてあのようなことになってしまった、というのではなく、やはり日本人の一人一人が歴史や世界について知らなすぎたことが良くなかった、という見解です。この全集の責任編集者も、おそらくそこを強く意識しているのだと思います。だから、歴史や世界を子供たちに知ってほしいという願いがあって、この全68巻が編まれたのではないのでしょうか。

今回『世界文化史物語』を読み直して、驚いたことがあります。最後のほうに戦後世界の問題点が挙げられているのですが、二つのドイツ、二つの朝鮮、中欧・東欧での動乱、アラブ連合のこれから、ときて、さらに日本の米軍基地問題についても書いてあるのです。国際法上、占領軍が占領を解いた後も基地を置くことの是非が問題になっていた、そのことを指摘しているのだらうと思いますが、ウェルズの没年は1946年ですから、死の直前にそこまで透徹した眼差しで世界を捉えていたことに、肅然としました。

この文学全集の特長と限界

私が思うこの全集の特長を述べます。繰り返しになりますが、歴史を大切にということです。一部の人だけでなく、子供から大人まで皆が歴史と世界に関心をもち、自分なりに考えられるようにとの姿勢で、この全集は編まれたのだと思います。

ほかには、小説や物語だけではなく詩や童謡にも目を向けていること、アンソ

ロジの巻があること、の二つを挙げたく思います。子供はそこから、文芸の世界の興行きを感じ取ったことでしょう。

ただし限界もあります。さきほど関口さんが『少女アネーリカ』がポーランド語ではなくロシア語から訳されていると教えてくださいましたが、できるだけ原語から翻訳する方針とはいえ、実際にはそうでないものもあります。また〈世界〉が偏っていて、欧米とロシアにはそれぞれ国の名前がついた巻がありますが、アフリカ、ラテンアメリカ、イスラム圏の収録作品はほぼないと言ってもいいような状態です。あるとしても、童話や民話が取られているだけです。ヨーロッパの中でもイギリス、フランス、ドイツが主要国であって、デンマークやスウェーデンは北欧というひとくくりに、イタリアやスペインも南欧としてひとくくりにされています。先ほども、諸国編の中にハンガリー、ポーランド、ブルガリアがまとめられていると申しましたが、そのような序列があります。おそらくこの序列は、当時の大学でも外国文学といえば英文学、フランス文学、ドイツ文学、ロシア文学であったことと呼応しているのではないでしょう。

また東洋に行くと、中国は別格で魯迅や巴金など作家名が付いた小説も入っていますが、ほかの国々は民話や童話が中心で、作家の作品までは入っていません。これがこの全集の限界かなという気がします。

子供の歴史認識

全集に限界があるだけでなく、子供のほうの歴史認識にも残念ながら限界があるという話をしたいと思います。先ほど第48巻の『アラビアのロレンス』については後でお話すると申しましたが、これはT・E・ロレンスの著作を読んだ中野好夫が、それを元に自ら書いた子供向けの評伝です。最後のところを読みます。

「オーランスがいない……」

アラビア人はロレンスのことを、オーランスとなまって呼ぶのです。オーランスは、いつかかならず、アラビアに帰ってきてくれる。(中略)

すべてのアラビア人がそう信じていました。オートバイを運転しそくなって、死んだというニュースがつたわっても、ほんとうだと思ふ者がありませんでした。「いつかかならず、オーランスは帰ってきてくれる。」

今でもそう信じているアラビア人があります。オーランスはどこかで、アラビア人を見ていてくれるのだ。アラビア人があやうくなれば、ふたたび砂漠にあらわれてすくってくれるのだとかたく信じているのです。

ロレンスは死にました。

しかしオーランスは、今もなお、すべてのアラビア人の心の中に生きているのです。

これが最後のページです。私はこれを読んで大感激して、「今もアラビアの飛行場の隅では、アラビアの人たちがロレンスの帰りを待っているんだって」と母に話したのですが、その途端に、母が「そんなことはあり得ない。なぜならば」と言って、イギリスの二枚舌外交、サイクス・ピコ協定の話を始めたのです。イギリスがアラブ人の独立を後押ししたわけではなく、あの地域を支配していたドイツ・トルコ連合のトルコ人を追い出すためにアラビア人を使ったのであって、追い出した暁には、イギリスとフランスとロシアがその地域を分割統治しようという密約ができていた。しかし、ロレンスは密約を途中から知っていたにもかかわらず、いっしょに戦ったフッセインやフェイザルにそれを話そうとしなかった。遅くともヴェルサイユ宮殿での第一次世界大戦講和会議に出席するフェイザルには密約の内容を事前に詳しく告げるべきであったのに。それは完全な裏切りであって、アラビア人はそれを知っている。そのアラビア人がロレンスを待っているわけがない。そういう説明で母は私の感激を退けました。たしかに中野好夫の『アラビアのロレンス』では、ロレンスがどこまで密約をアラビア側に伝えたかは、あいまいになっています。母の話で私はべしゃんこになり、何も言えなくなっていました。

また、子供の知識は限られていますから、誤読のようなことも起きます。先に触れた『森のほのお』と『若き親衛隊』の話をしますと、二作品とも大祖国戦争での対独パルチザン、レジスタンスを描いた小説です。

オセーエワの『森のほのお』は、岩波少年文庫『ワシヨークと仲間たち』の続編で、小学校5年生のモスクワっ子たちが、1941年の夏にサマースクールでウクライナに行くところから始まります。ところが直後にウクライナにドイツ軍が侵攻、モスクワに帰れなくなった小学生たちがウクライナの子供たちと協力して通信係になったりピラを貼ったり、対独レジスタンスに立ち上がる話です。

後者の『若き親衛隊』は、クラスノドンというウクライナの炭鉱町の高校生たちが、ドイツ軍に抵抗する組織を作り、武器庫を爆破したり、連れ去られようとする人たちをトラックから助けたり、かなり危険なパルチザン活動に決起する話です。『若き親衛隊』は実話で、高校生組織は最終的には100人以上になりましたが、1943年の初めにはほぼ全員が捕まり、8名を残して処刑されてしまいました。それはソヴィエト軍がクラスノドンを奪回するほんのひと月ほど前のことだったのです。

高校生たちの話はモスクワに伝わって調査団が送られ、彼らの活動が詳しい報告書になりました。それを元に戦後すぐに小説として刊行されたのが『若き親衛隊』です。執筆はファジェーエフ、赤軍兵士として活躍して小説家になった人で、当時のソヴィエトでは厚い信任を得ていました。小説は感動を呼び、刊行時のソヴィエトでは何百万部が読まれたそうです。

私も大感激して読んだのですが、あるときふと『森のほのお』も『若き親衛隊』

もウクライナが舞台であることに気づきました。ソヴィエトは広大なのに、翻訳されて日本にまで伝わる対独バルチザンの物語が、なぜ二つともウクライナを舞台にしているのだろう、偶然ではなく何か理由があるのだろうかと疑問に思いました。その頃はインターネットもありませんし、疑問は疑問のままだったのですが、その後ウクライナの大飢饉やスターリンとウクライナの緊張関係を知ると、ウクライナを懐柔するために、その地を舞台にした英雄的なレジスタンスの話が書かれたのかもしれない、という気がしてきました。

さらに考えさせられたのは、ファジェーエフの自殺です。子供の頃に読んだ『若き親衛隊』は抄訳だったのですが、のちに青木文庫の五巻本を古本屋で手に入れました。訳者の黒田辰男の解説によると、この小説は出されて評判になったにもかかわらず、1947年になってプラウダで批判された。どこが批判されたかというところ、この高校生たちはまるで自分たちで組織し、自主的に活動したように書いてあるけれども、これはコミンテルンの指導の下に行われたというのが正しいのである。そのことがこの小説では書き足りていない、党の指導的・教育的役割が欠如している。そういうふうには批判され、ファジェーエフは書き直しを命じられて、それに従っているのです。貧富の差をなくす共産主義にそれなりの夢を抱いていた私は、そこで考え込んでしまいました。国家が作家に書き直しを命じる、それも党の威信や無謬を称揚するために、自主性を取り締まる方向で書き直しを命じるのです。それが通るなら、平等と自由は両立しないということになるのだろうか。

青木文庫版の『若き親衛隊』は1953年の刊行。同年にスターリンが死んで、56年2月にスターリン批判が起こります。そしてファジェーエフはその数ヶ月後、56年5月13日に自殺するのです。時の権力に重用された作家は、体制が変わったときには死ななければならない、ファジェーエフの自殺は政治的な死だと思いました。

しかしそれらのことを何も知らずに創元社の全集で『若き親衛隊』を読んでいた子供時代の私は、ラジオから流れるスターリンの演説に聴き入る高校生に共感し、彼らのあいだで敬愛をこめて〈あのひと〉と呼ばれるスターリンが、モスクワの地から「同志諸君！」と呼びかけるその声を想像したりしていました。

つまり子供の歴史認識には限界があります。ただし『アラビアのロレンス』に対して母が取った態度、「それは違う」と親が言い切ってしまうのは、いささかやり過ぎではないでしょうか。子供は先へ先へと考えをつないでいき、ゆっくり真実に近づいていくのですから、その途中でべしゃんこにしないで、少しの訂正でいいのではないかと、今の私は思っています。

読んだ本について語り合うこと

最後に、読んだ本について語り合うことについてお話しします。読んだ本について人と話すのは、とても素敵なことだと思います。管啓次郎さんの『本は読め

ないものだから心配するな』(左右社／ちくま文庫)や、『本につれられて』という学生に向けたパンフレットの中には、本を読むことの楽しさが存分に書かれていて、たとえば「言葉とは人間が手に入れた最も強力なドラッグであり、それは意識を変える」などという管さんらしい警句が入っていたりするのですが、管さんの本に一つだけ私がつけ加えるとすると、できれば読んだ本について忌憚なく語り合える友人をつくるとよい、ということです。

私の詩集『素晴らしい低空飛行』の中に、三島由紀夫の『豊饒の海』をめぐって、高校生が交わす会話が出てくるのですが、あれは実話です。その頃私は『豊饒の海』を『新潮』連載時にリアルタイムで読んでいて、だからこそ、自殺のニュースにはたいへんな衝撃を受けました。それで、自殺当日の夕方に『豊饒の海』をまだ読んでいない友人と会って長々と内容を説明したところ、「で、その四つの話はどうつながってるの?」と聞かれ、「輪廻転生でつながってるの」と答えた途端、相手から「えー? 現代文学でそれは駄目でしょ、それは作家としての枯渇でしょ」と言われたのです。私のほうが驚いて、そういう考え方もあるのかと思いました。そして、その枯渇と今日の自殺は関係があるのかもしれない、とも感じました。そのときの驚きを、何十年も経ってから詩に取り込んだのが『素晴らしい低空飛行』の中の1篇「口語的实践」です。

このように私には、小学生のときから今に至るまで、必ず何人かは読んだ本について語り合う人が周囲にいました。そのことを今、ありがたく感じています。

質疑応答

質問1 創元社の「世界少年少女文学全集」を読むときに、第1巻から順番に読みましたか。

私の場合は、何年も前に刊行を終えて既にそろっていたものに会ったので、第1巻から読んでいきました。配本は巻の順番通りではありませんので、刊行時に予約購読していた人たちは届いた順に読んでいたと思いますが、私の場合は第1巻からでした。

質問2 貸してくれた友達のほうも、全巻読んでいたのでしょうか。

後になってその子からは、「この人はなぜうちの本をこんなに借りていくのでしょうと思っていた」と言われました。でも、彼女とも読んだ本についてよく話し合いました。ある物語の中で、当然結婚するだろうと思っていた二人が結ばれなかったというストーリー展開があり、私が彼女に「二人は結婚しなかったのね、残念」と言ったら、彼女はさらりと「だから私、あれ、結婚したってことにしたの」と答えたのです。私はびっくりして、「人の書いた話を勝手に変えていいの?」

と訊くと、「だってそのほうがいいじゃない」と言うので、私はまたまた驚いて、そのことを思いつかなかった自分の頭の固さによけい落ち込んでしまいました。

質問3 この文学全集は二段組みで文字もたくさんありますが、それよりも前の段階で好きだった絵本などを教えてください。

岩波書店の絵本、『ちいさいおうち』『百まいのきもの』などが好きでした。『百まいのきもの』はアメリカの小さな町が舞台で、貧しいポーランド移民の女の子が出てくるのですが、アメリカ社会におけるポーランド移民の立場に考えがおよんだのは、ずっとあとのことです。

質問4 知人の子供さんに本をプレゼントすることが好きなのですが、押しつけて本当は良くないかなとも思っています。阿部さんはどう思いますか。

良くない、なんてことはないと思います。趣味に合わなければ、子供はそっと脇へ置いておくでしょう。先ほど笠間さんが子供の頃に言葉遊びをととても楽しんだとおっしゃいましたが、子供によって、言葉遊びが大好きな子供もいれば、ストーリーに惹かれる子供もいるし、絵に見入る子供もいます。いろいろだと思うので、とにかく自分が信じるものを渡してみて、でも「読んだ？」などと後で聞かないようにすればいいんじゃないでしょうか。

質問5 この「世界少年少女文学全集」の時代には、子供向けに体系だった教養をすべて与えるのだという意気込みでつくられた高価な全集が出ていましたが、今はそのようなものはあまりないのでしょうか。

最近の新聞に、小学館が電子書籍で『小学館世界J文学館』を発売するという記事が出ていました。Jは児童、ジュニア、次世代とのこと。かつての児童文学全集が掲げていた教養主義が成り立たなくなっている今の時代に、お仕着せではない全集をどう編むのか、作品選択が気になります。私自身は創元社の全集を読むことができてよかったと思っていますが、先ほどお話したように、この時代の全集には西欧の文学に偏りすぎという限界もありました。結局、自分の読書は自分で選んでいくほかありません。自分の好きなものを見極めて、自分でこの本とあの本とを関係づけて、最終的に自分の中で全集をつくっていくことができれば、それでいいのだと思います。

【附録 1】

創元社 世界少年少女文学全集
 発行所 株式会社東京創元社
 発行者 小林茂

第一部第一期 (1953.5.1～1955.4.30) 全32巻、各巻380円
 責任編集 阿部知二、川端康成、高橋健二、坪田譲治、
 装幀 初山滋

豊島与志雄、米川正夫

巻数	内容	口絵	作家名	作品名	訳者	挿絵	備考
第1巻 1954.3.15発行 第16回配本	古代編	岩崎鐸 ヘルメス像 写真	ホメーロス	ギリシア神話 ホーマー物語 (オデュッセイア、イーリアス) 北欧神話	田中秀央・姫 野誠二 呉茂一 松村武雄	岩崎鐸 岩崎鐸 岩崎鐸	T・P・フィレンチ 『伝説の時代』 ゼームント『古エッ ダ』、S・シュツルレ ノン『新エッダ』
第2巻 1954.12.20発行 第28回配本	中世編	川端実	アイソーポス ノルマン・F・ラングフォールド	イソップ物語 アーサー王物語 ローランの歌 ニーベルンゲン物語 (ニーベルンゲンの中の、 聖杯王ハルチファール、白鳥の騎士ローエングリン) イエス・キリスト物語	新村出 松村達雄 佐藤輝夫 相良守峰 村岡花子	阿部展也 原書挿絵? 川端実 川端実 川端実	T・マロリー『アー サー王の死』 ウォルフラム『パ ルチファール』 原題 "The King Nobody Wanted"
第3巻 1954.1.25発行 第13回配本	イギリス 編 1	三田康 秋岡芳夫		イングリッド童話集 (ジャックと豆の木、親指 トムの物語など15編) スコットランド童話集 (詩人トマス、怪物レッ ド・エティンなど12編) アイルランド童話集 (妖精ハンシー、高慢な王 女など18編) ロビン フッド	福原麟太郎 福原麟太郎 福原麟太郎	三田康 鳥居敏文 秋岡芳夫	E・S・ハートランド 編集『イングランド の童話民話集』 クリアスス女史『ス コットランドの童 話集』 イェイツ収集『アイ ルランド童話民話 集』 H・E・マーマーシャル『ロ ビンフット物語』

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第4巻 1954.3.31発行 第17回配本	イギリス 編 2	石川滋彦 横山隆一	ダニエル・デフォー	ロビンソン・クルーソー	吉田健一	原書挿絵?	
第5巻 1953.8.1発行 第5回配本	イギリス 編 3	向井潤吉	ジョナサン・スウィフト	ガリヴァー旅行記 宝島	阿部知二	横山隆一	
第6巻 1954.5.20発行 第20回配本	イギリス 編 4	富山妙子 島村三七雄	ラディヤード・キップリング ウィリアム・シェイクスピア	ジャングル・ブック シェイクスピア物語 (ヴェニスの商人、ハムレット)	西村孝次	向井潤吉	
			チャールズ・ディケンズ ルイス・キャロル	クリスマス・キャロル ふしぎの国のアリス	原島善衛 吉田健一	島村三七雄 ジョーン・デ ニエル	C・ラム『シェイク スピア物語』
			ウィーダ女史 オスカー・ワイルド ジェームズ・バリー	フランダーズの犬 幸福の王子 ピーター・パン	村岡花子 阿部知二 本多顕彰	島村三七雄 原田ミナミ 原田ミナミ	
第7巻 1955.3.25発行 第31回配本	アメリカ 編 1	向井潤吉	ハリエット・ストウ ワシントン・アーヴィング	アンクル・トムズ・ケビン リップ・ヴァン・ウィンクル	田中西二郎 松村達雄	向井潤吉	
第8巻 1953.12.15発行 第11回配本	アメリカ 編 2	油野誠一	ルイザ・メイ・オルコット	若草物語 こがね虫	安藤一郎 谷崎精二	油野誠一	原題 "Little Women"
第9巻 1953.6.1発行 第2回配本	アメリカ 編 3	堀文子	エドガー・アラン・ポオ フランセス・エリザ・ホヰン・バーネット 同	小公子 小公女	川端康成・野 上彰 川端康成・野 上彰	堀文子 堀文子	
第10巻 1954.2.28発行 第15回配本	アメリカ 編 4	寺田竹雄	メグザリー・R・ロウリン グズ マーク・ツヴェーエン	子じか物語 トム・ソーヤーの冒険	吉田甲子太郎 吉田甲子太郎	寺田竹雄	原題 "The Yearling"
第11巻 1954.7.31発行 第22回配本	フランス 編 1	鷹山宇一 高橋忠弥	フランソワ・ラブレ ラ・フォンテーヌ シャル・ペロー マリ・カトリーズ・ド・ノーワ マリ・ルブラン・ド・ボーモン	きつね物語 ガルガンチュワとパンタグリュエルの物語 ラ・フォンテーヌ寓話集 ペロー童話集 青い鳥 美女と野獣	佐藤輝夫 渡辺一夫 市原豊太 佐藤正彰 小林正 小林正	鷹山宇一 ギュスター ヴ・ドレ 高橋忠弥 高橋忠弥 高橋忠弥	

第12巻 1955.1.15発行 第29回配本	フランス 編 2	風間完	エクトル・マロ	家なき子	桜田佐	風間完	
第13巻 1953.10.29発行 第8回配本	フランス 編 3	大沢昌助 茂田井武	ジョルジュ・サンド フロスベル・メリメ アルフォンス・ドーデー 同 ギイ・ド・モーパッサン 同 シャルル・ヴィルドラック ジュール・ルナール	ものを言うかしの木 マテオ・ファルコナー 月曜物語 風車小屋だより めぐりあい 小犬のピエロ ライオンのめがね にんじん	杉捷夫 宮崎巖雄 桜田佐 河盛好蔵 河盛好蔵 石川勇 岸田国士	森田元子 大沢昌助 大沢昌助 森田元子 森田元子 F・ヴァロツ トン	
第14巻 1954.4.30発行 第19回配本	ドイツ編 1	高橋忠弥 西田勝	ヤーコプ&ヴィルヘルム・グリム グリム ヴィルヘルム・ハウフ	グリム童話集 ハウフ童話集 隊商 石の心臓	相良守峰 角信雄 高橋健二	高橋忠弥 西田勝 西田勝	原題 “Das kalte Herz”
第15巻 1954.2.15発行 第14回配本	ドイツ編 2	沢田正太郎 吉井忠	マルチン・ルター ゴットホルト・E・レッシング ヨハン・ペーター・ヘーベル E・T・アマデウス・ホフマン フリードリヒ・ヘッペル ルートヴィヒ・ベヒシュタイン リヒャルト・レアンダー アグネス・ザッペル ミュンヒハウゼン+ゴット フリードリヒ・アウグスト・ビュ ルガー	ルター寓話集 レッシング寓話集 ヘーベル童話集 くるみわり人形 紅玉 (ルビー) 子ねずみザンバル フランスの暖炉のそばの夢 一年生時代 空想男爵の冒険	高橋健二 高橋健二 植田敏郎 石丸静雄 角信雄 角信雄 余川文彦 植田敏郎 高橋健二	沢田正太郎 沢田正太郎 沢田正太郎 沢田正太郎 沢田正太郎 原書挿絵? 吉井忠 ギュスター ヴ・ドレ	
第16巻 1953.1.15発行 第1回配本	ドイツ編 3	油野誠一	エーリヒ・ケストナー 同 ワルデマル・ボンゼルス 同	飛ぶ教室 ケストナー氏の二、三の意見 みつばちマーマヤの冒険 歩道の紙包み	高橋健二 高橋健二 高橋健二 高橋健二	油野誠一 挿絵無し 油野誠一 油野誠一	『点子ちゃんとアン トン』から 『幼年時代』から

第20巻 1953.11.5発行 第9回配本	ロシア編 3	原書口絵？ 佐藤忠良	フォード・クル・クジミッチ・ソ ロクレーブ アレクサンデル・I・クレーブ リン 同 マクシム・ゴーリキー バーヴェル・P・パジューフ アレクセイ・N・トルストイ ウラザーミル・L・ドゥーロフ サムイル・Y・マルシャーク K・G・パウストーフスキイ 同 ミハイル・M・ブリーシヴィン パンテレーエフ アルカージェー・P・ガイダル ハンス・クリスチャン・アン デルセン 同	かくれんぼ 犬の幸福 ぞうの病氣見まい 海つばめの歌 石の花 水の精の話 わたしの動物 小さいお城 シンデレラとすずめ あたたかいパン 太陽の倉 金時計 チームールとその隊員 アンデルセン童話集	昇曙夢 米川正夫 米川正夫 池田豊 神西清 和久利智一 井上満 袋一平 袋一平 袋一平 袋一平 樋本楠郎 井上満 平林広人 平林広人	佐藤忠良 佐藤忠良 佐藤忠良 佐藤忠良 原書挿絵？ 佐藤忠良 原書挿絵？ 佐藤忠良 佐藤忠良 佐藤忠良 原書挿絵？ 佐藤忠良 原書挿絵？ 原書挿絵？ アンデルセン本人のスケッチや切り絵	
第21巻 1953.10.1発行 第7回配本	北欧編1	初山滋	サカリ・トベリウス、ヨセフ・コーヘン、J・A・ヘルゲルスほか ヨハン・アウグスト・ストリンドベリ セルマ・ラゲルレフ ヨーン・スウェンソン 同 ジャン・バット・イ・スタール ジョーレ ミゲル・デ・セルバンテス	北欧童話集 ストリンドベリ童話集 ニルスのふしぎな旅 ノンニの冒険 小ひつじ イタリア童話集 (ペンタメローネ) スペイン童話集 ドン・キホーテ	山室静・石田英一郎・桑本務・朝倉純孝 山室静 香川鉄蔵 伊藤保 伊藤保 柏熊達生 会田由 会田由	桂ユキ子 桂ユキ子 桂ユキ子 原書挿絵？ 原書挿絵？ 原書挿絵？ 野崎貢 野崎貢 ギョースター ウ・セロー	
第22巻 1954.4.15発行 第18回配本	北欧編2	桂ユキ子 鶴岡政男	同				
第23巻 1954.10.31発行 第25回配本	南欧編1	森芳雄 森芳雄？	同				

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第24巻 1953.7.1発行 第3回配本	南欧編 2	斎藤長三 斎藤長三	カルロ・コッローディ エドモンド・デ・アミーナス	ピノッキオ クオレ (愛の学校)	柏熊達生 柏熊達生	斎藤長三 斎藤長三	
第25巻 1954.6.15発行 第21回配本	東洋編 1	福田紹太郎 田中田鶴子		東洋童話集 アイヌ童話集 朝鮮童話集 蒙古童話集 中国童話集 ビルマ童話集 台湾童話集 フィリピン童話集 南洋諸島童話集 インド童話集	金田一京助 野口赫宙 服部四郎 魚返善雄 秋山修道 横本楠郎 松村武雄 松村武雄	福田紹太郎 福田紹太郎 福田紹太郎 吉金一郎 阿部展也 阿部展也 阿部展也	高砂族の民話 田・T・フ ラ ン シ ス 『ジャータカ物語』、 T・ベンファイ『パ ンチャントラ』 F・J・オルコット『ペ ルシア神仙物語』 I・クスノ『四十四 のトルコ童話集』
第26巻 1954.1.1発行 第12回配本	東洋編 2	清水崑 茂田井武		水語伝 西遊記 アラビアン・ナイト	奥野信太郎 魚返善雄 佐藤正彰	清水崑 茂田井武 油野誠一	奥承恩編著版
第27巻 1954.12.5発行 第27回配本	東洋編 3	油野誠一					
第28巻 1954.8.15発行 第23回配本	日本編 1	中尾彰		日本童話集 (つるの恩返し、浦島太郎など74編)	坪田誠治	中尾彰	
第29巻 1955.2.25発行 第30回配本	日本編 2	井上三綱 原田ミナミ		日本古典文学集1 古事記物語 竹取物語 今昔物語 堤中納言物語	林房雄 川端康成 片桐顕智 中村正爾	井上三綱 原田ミナミ 井上三綱 原田ミナミ	

第30巻 1953.9.1発行 第6回配本	日本編 3	脇田和 中谷泰	上田秋成	宇治拾遺物語 義経記 おとぎ草子 狂言	片桐顕智 高木卓 堀尾勉 北村寿夫	風間完 風間完 風間完 吉田謙吉	「ぶす」「きつね塚」 「柿山伏」
第31巻 1954.11.15発行 第26回配本	世界児童 劇集	舞台写真 V・ヴァスネ ツォーフ	ジェームズ・バリ スチュアート・ウォーカー R・タゴール A・N・オストロフスキ セルゲイ・V・ミハルコフ 秋田雨雀	雨月物語集 文芸童話集 山椒大夫 耳なし芳一の話 おんどりの冒険 一ふさのぶどう 清兵衛とひょうたん つるの話 少年駅伝夫、湖水の鐘 くもの糸、杜子春 たからもの、いなごの大旅行 エミリアンの旅、山ねこルル 春をつげる鳥、雪だるま、龍介の天上 殺長の探偵、こまどり温泉 やねの上のサワン 赤いろうそくと人魚、野ばらなど4編 かつばの話、お馬など7編 五匹のやもり ちゅうもんもの多い料理店、オッペルとぞうな と4編	光吉夏彌	風間完 穂田一穂 穂田一穂 相絵無し 穂田一穂 穂田一穂 穂田一穂 中谷泰 穂田一穂 脇田和 中谷泰 中谷泰 脇田和 脇田和 中谷泰 脇田和 中谷泰 脇田和	芝田圭一 河野国夫 芝田圭一 河野国夫、 V・ヴァスネ ツォーフ 芝田圭一 芝田圭一

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第32巻 1955.4.30発行 第32回配本			武者小路実篤 久保田万太郎 藤森成吉 斎田喬 木下順二	だるま 北風のくれたたテールブルかけ 友だち 四つ辻のピッポ 彦市ばなし 英米の童謡(マザア グウス、デ・ラ・メアなど97編)	野上 彰・西条 八十 三好達治・伊 藤海彦など 植田敏郎・藤 田圭雄 金子 幸彦・神 西清など 黎波 金素雲	河野国夫 芝田圭一 河野国夫 芝田圭一 河野国夫	
	世界童謡 集	初山滋		フランスの童謡 (ラ・フォンテーヌ、ユーゴーなど12編) ドイツの童謡 (デーメルなど22編) ロシアの童謡(プーシキン、ツルゲーネフなど12編) 日本の童謡 (北原白秋、与田準一など35編) 中国の童謡13編 朝鮮の童謡 8 編 ☆楽譜編 日本の童謡 (まりと殿さま、青森地方の子守歌など32編) 中国の童謡 (桃の花) 朝鮮の童謡 (手まり歌) フランスの童謡 (むかしの話、ふたごのジャックなど9編) ロシアの童謡 (子ぶたのチュエシカちゃん、赤いサラファンなど5編) ドイツの童謡 (め牛が逃げた、タベの星など7編) スウェーデンの童謡 (小さい靴、ひばりのラーケなど6編) スペインの童謡 (ぞうのお鼻、白い花など4編) チロル地方の童謡 (山の牧場よさようなら) ハンガリーの童謡 (木馬の雨) イギリスの童謡 (夢のお国、ジンケル・ベルなど7編)		初山滋 初山滋 初山滋	

アメリカの童話 (なつかしのケンタッキー、草競馬など3編)

第一部第二期 (1955.5.30~1956.11.30) 全18巻、各巻380円
責任編集 阿部知二、川端康成、高橋健二、坪田譲治、豊島与志雄、米川正夫
装幀 初山滋

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第33巻 1955.10.15発行 第37回配本	イギリス 編 5	山本蘭村 大沢昌助	ジョン・ラスキン チャールズ・デイクেনズ アンナ・シュエエル	黄金の川の王さま オリヴァ・トウィスト 黒馬物語	安藤一郎 福田鱒太郎 大沢昌助	大沢昌助 山本蘭村 大沢昌助	
第34巻 1956.8.13発行 第47回配本	イギリス 編 6	由良玲吉 山口薫	ハーバート・ジョージ・ウェルズ キャサリン・マンスフィード デ・ラ・メア	宇宙戦争 マンズフィード短編集（少女、人形の家など5編） なぞ物語	西村孝次 松村達雄 野上彰 吉田甲子太郎	由良玲吉 山口薫 油野誠一 斎藤愛子	
第35巻 1956.11.30発行 第50回配本	アメリカ 編 5	斎藤愛子	マーケ・ツウウェーン	ハックルベリー・フィンの冒険			
第36巻 1955.12.15発行 第39回配本	アメリカ 編 6	赤穴宏 赤穴宏？	ジャック・ロンドン ジーン・ウェーブスター カール・サンランド ウィリアム・サロイアン アレクサンドル・デューマ ジュール・ヴェルヌ	荒野の呼び声 あしながおじさん 黄金のアコordeオン、白金少年と青銅少女など4編 美しき白馬の夏、長老教会の合唱隊 三銃士物語 十五少年漂流記	阿部知二 川端康成 野上彰 新庄哲夫 斎藤義治 岩崎嶺雄 石川湧	赤穴宏 ウェブスター 本人のイラスト 原書挿絵？ 原書挿絵？ 岩崎嶺 荻太郎	
第37巻 1955.11.5発行 第38回配本	フランス 編 4	岩崎嶺	ロマン・ロラン シャルル＝ルイ・フィリップ ジュール・ルメートル アンドレ＝モーロワ アナトール・フランス	ジャン・クリストフ物語 小さき町にて 短編（大きな靴、オランジュ奪回など4編） デブの国とノッポの国 少年少女	宮本正清 淀野隆三 江口清 小林正 三好達治	油野誠一 吉井忠 吉井忠 油野誠一 エディ・ルグナン	
第38巻 1955.5.30発行 第33回配本	フランス 編 5	油野誠一					

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第39巻 1956.6.25発行 第34回配本	ドイツ編 5	伊勢正義 朝倉撰	テオドール・シュトルム ルートヴィヒ・トーマ エーリヒ・ケストナー シュテファン・アンドレス ハンス・フリードリヒ・ブル ンク	人形つかいのボーレ 悪童物語 ユーミールと怪わざ師 雲に乗った家 短編 (婦人報、仙女ホレレルと恋人たちなど3編)	角信雄 植田敏郎 高橋健二 石丸静雄 相良守峰	伊勢正義 原書挿絵? 朝倉撰 朝倉撰 原書挿絵? 朝倉撰	
第40巻 1956.2.5発行 第41回配本	ドイツ編 6	油野誠一 赤穴桂子	レオンハルト・フランク マンフレート・ハウスマン 同 フリードリヒ・シュナック	少年冒険団 弓を持ったオントエ マルチン おもちゃ屋のクリック	菊盛英夫 植田敏郎 高橋健二 大山定一	油野誠一 赤穴桂子 原書挿絵? 赤穴桂子	
第41巻 1956.1.5発行 第40回配本	ロシア編 4	佐藤忠良	セルゲイ・P・アントーノフ ワレンチナ・A・オセーエワ	緑の谷 森のほのお	井上満 袋一平	原書挿絵? 原書挿絵?	『ワシヨーク・トルバ チヨーフとそのなか ま』三部作の第二部
第42巻 1956.10.5発行 第49回配本	東洋編 4	福田紹太郎 富山妙子	ベージイク エメリヤーノフ ニコライ・S・チーホノフ ローリヤ ニコライ・ニコラエヴィチ・ ノソフ K・G・バウストーフスキイ 蒲松齡	ソヴェト短編集 友情 みんなのしごと 「まだ生きている!」 みかん ヨールカ リョーニニヤ・ポプロフ	東郷正延 東郷正延 東郷正延 東郷正延 米川和夫 米川和夫	原書挿絵? 同 同 同 同 同	
第43巻 1956.7.5発行 第46回配本	東洋編 5	岡本吉右衛門 久米宏一	魯迅 葉紹鈞 同 巴金 張天翼	現代中国童話集 阿Q正伝、あひるの喜劇、宮芝居 「かがし」から9編 古代英雄の石像 長生塔、もの言う木 ロー・ウエンイン君の話	奥野信太郎 柴田天馬 奥野信太郎 竹内好 楳本楠郎 新島淳良 岡崎俊夫 伊藤敬一	福田紹太郎 富山妙子 福田紹太郎 豊子愷 + 吉 田重郎 吉田重郎 吉田重郎 久米宏一 久米宏一	

第44巻 1956.5.5発行 第44回配本	日本編4	丁玲 秦兆陽 嚴文井 駱賓基 金南天 安懷南 李泰俊	スズ つばめの大旅行 みみずとみづばち 老女中 朝鮮童話集 明かるい朝 まぼろしの母 城北だより 日本古典文学集2 落窪物語 平家物語 中世説話物語（鉢をとばす聖、伴大納言事件 など5編） 曾我物語 西鶴諸国話 東海道中膝栗毛 弓張月物語 現代童話集 大万化狐 十二歳の半年 暗い土の中でおこなわれたこと、黒物語、片 耳の大しか 山のねこトム 子ども おとな ずくびき 花電車 柿の木のあある家、ヤッチャン 川をわたる歌声 ぬすまれた自転車	奥野信太郎 斎藤秋男 斎藤秋男 飯塚朗 野口赫宙 野口赫宙 野口赫宙 中村正彌 富倉惣次郎 井本農一 高木卓 杉森久英 野上彰 林房雄	久米宏一 秦兆陽？ 蕭淑芳 久米宏一 久米宏一 久米宏一 久米宏一 久米宏一 福田紹太郎 久米宏一 福田紹太郎 久米宏一 茂田井武 福田紹太郎 中尾彰・斎藤 長三・深尾紅 子・須田寿	「信貴山縁起絵巻」 （鳥羽僧正筆？）、「伴 大納言絵詞」、「古 今著聞集」（橘成季 編）、「沙石集」（無 住法師編）、「水蛙 眼目」（阿阿）から
第45巻 1956.3.15発行 第42回配本	日本編5	青木茂 北島八穂 椋嶋十 石井桃子 飯沢匡 塚原健二郎 横本楠郎 壺井栄 川崎大治 猪野省三	中尾彰 須田寿			

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第46巻 1955.8.31発行 第36回配本	推理小説 集	永田力 太田大八	国分一太郎	大遊ばせ	水谷準 水谷準 水谷準 中野好夫 西田政治 西田政治 西田政治 水谷準	永田力 永田力 永田力 中谷泰 高井寛二 高井寛二 高井寛二 太田大八	
			岡英雄	鎮時計			
			岡本良雄	ある町の話			
			千葉省三	乗合馬車			
			浜田広介	ふしぎな山のおじいさん			
			吉田甲子太郎	自転車屋の夢			
			酒井朝彦	雪娘			
			奈街三郎	夜の木馬			
			後藤橋根	空をとんだケイタ			
			坪田誠治	夢、がまの芸当、犬と友だち、おじいさんと おばあさん			
第47巻 1955.7.31発行 第35回配本	動物文学 集	原書口絵? 三芳悌吉	木内高音	建設列車	内山賢次 井上満 袋一平 末村庄三郎 山室静	シートン 原書挿絵? 原書挿絵? 三芳悌吉 三芳悌吉	
			平塚武二	玉虫のずしの物語			
			与田準一	月の顔、花もよろしい			
			佐藤義美	歩いた雪だるま、ねこばば			
			新美南吉	牛をつないだつばきの木、ごんぎつね			
			小川未明	考えこじき			
			アーサー・コナン・ドイル	六つのナポレオン			
			同	まだらのひも			
			同	赤毛組合			
			同	四つの署名			
第47巻 1955.7.31発行 第35回配本	動物文学 集	原書口絵? 三芳悌吉	エドガー・アラン・ポオ	盗まれた手紙	西田政治 西田政治 西田政治 水谷準	高井寛二 高井寛二 高井寛二 太田大八	
			ギルバート・キース・チェス タートン	青い十字架			
			オースチン・フリーマン	アルミの短剣			
			レオナード・J・ピーストン	マイナス家の黄色ダイヤ			
			ガストン・ルルー	黄色の部屋			
			アーネスト・トムソン・シートン	動物記			
			V・K・アルセーニエフ	密林で出あった動物たち			
			ヴィタリイ・V・ビアンキ	しじゅうから日記			
			ジャン＝アンリ・C・ファアブル	昆虫記			
			エウル	さんご、かつこう			

第48巻 1956.4.5発行 第43回配本	世界探検 紀行集	向井潤吉 三芳悌吉	アンドレ・ドメーゾン ヘルマン・レーンズ ウィリアム・ヘンリー・ハド ソン	ぞうのプーバ ペル・ヴィドゥー とんぼのあらし ソン	石川湧 植田敏郎 内田清之助	茂田井武 茂田井茂 三芳悌吉	『野獣記』の—編
第49巻 1956.6.10発行 第45回配本	世界伝記 文学集	ミレー「落 ち穂拾い」	中野好夫 ハインリヒ・シュリーマン 高橋健二	南極探検物語 夢を発掘した人 ヒマラヤのみなに	平田寛	太田大八 原書挿絵？ 向井潤吉	ロバート・P・ス コットの著作や関 連書物から スウェン・A・ヘ デイーン『探検家 としてのわが生涯』 から T・E・ロレンス『知恵 の七柱』や伝記から E・クレンケリ『四 人の友だち』から
		エドワード・ウィンパー エルンスト・クレンケリ	中野好夫 エドワード・ウィンパー エルンスト・クレンケリ	アラビアのロレンス マッターホルン登はん物語 北極漂流探検記	近藤等 袋一平	向井潤吉 エドワード・ ウィンパー 三芳悌吉	
		ブルタルコス アルフォンス・ド・ラマル チャース 大山定一	ブルタルク英雄伝 ジャンヌ・ダルク レンブラント		木村庄三郎 宮崎嶺雄	油野誠一 油野誠一 レンブラン トの作品 杉全直 ミレーの作 品 内田武夫	E・ルードヴィヒ 『芸術と運命』、R・ ムーテル『レンブラ ント』から 福沢諭吉『福翁自 伝』から
		シュテファン・ツワイク 植田敏郎 ロマン・ロラン 富田正文 武谷三男・一羽昌子 阿部知二 ミハイル・イリン 山室静	ワーテルローのナポレオン ペートーヴェン ミレー 福沢諭吉 キュリー夫人 ガンジー ミシュエリン シュワイツァー	大野俊一 蛭原徳夫 袋一平			

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第50巻 1956.9.5発行 第48回配本	世界名作 劇集	藤城清治 舞台写真	モーリス・メーテルリンク ウィリアム・シェイクスピア ボーモン夫人原作 マド レーヌ・バルデュレ脚色 染彦・熊鷹声 ルッツ・ノイハウス サムイル・Y・マルシャーク フランク・バウム原作 E・チャップマン脚色 宮沢賢治	青い鳥 マルヴォリオだまし ペルとペート はたおり姫 メキシコへ行こうと思ったら ねこの家 オズの国 鉦鐵陣営	若月紫蘭 福田恆存 原千代海 伊藤敬一 加藤衛 池田健太郎 北村喜八 北川勇	北川勇 北川勇 藤城清治 藤城清治 北川勇 藤城清治 北川勇 北川勇	『十二夜』から

第二部 (1956.12.20～1958.5.25) 全18巻、各巻380円
責任編集 阿部知二、川端康成、高橋健二、坪田譲治、米川正夫
装幀 初山滋

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第1巻 1957.7.25発行 第8回配本	イギリス 編 1	油野誠一	ロバート・ルイス・ステイヤー ヴァンスン	さらわれたデューヴィド	中野好夫	油野誠一	
第2巻 1956.12.20発行 第1回配本	イギリス 編 2	油野誠一 初山滋	ケネス・グレアム オスカール・ワイルド ラディヤード・キップリング	ひきがえるの冒険 漁師とその魂 短編 (ウィー・ウィー・ウィンキー、山の娘など4編)	石井桃子 松村達雄 平井呈一	油野誠一 初山滋 油野誠一	原題 "The Wind in the Willows"
第3巻 1958.2.25発行 第15回配本	アメリカ 編 1	山中春雄	ジョエル・チャンドラ・ハリス オサニエル・ホーソン アース・ターキントン	リーマースおじさん 魔法の水さし いたずらっ子ベンロッド	斎藤数衛 斎藤数衛 田島博	原書挿絵? 山中春雄 山中春雄	
第4巻 1957.3.30発行 第4回配本	アメリカ 編 2	野崎貢	マーク・ツワエーン ルイザ・メイ・オルコット	トム・ソーヤーの探偵 ジャックとシル	大久保康雄 大久保康雄	野崎貢 野崎貢	
第5巻 1957.9.15発行 第10回配本	フランス 編 1	角浩	ジュール・ヴェルヌ ビエール・マッコルラン	地底旅行 黄大亭のお客たち	石川勇 石川勇	角浩 角浩	

第6巻 1957.5.20発行 第6回配本	フランス 編2	井上長三郎・ 照子 赤穴桂子	アンドレ・クリクタンベルジュ アナトール・フランス ジャック・ポルシャ アンドレ・モローワ アンドレ・ジャンソン	かわいいたロット アベイユ姫 モーリス少年の冒険 なんでも自由にできる国 マガリの話	桜井成夫 市原豊太 石川湧 江口清 小林正	井上照子 赤穴桂子 井上長三郎 井上長三郎 原書挿絵?
第7巻 1957.2.25発行 第3回配本	ドイツ編 1	原ミナミ 伊藤好一郎	ルイーゼ・リンザー ウィルヘルム・シュバイヤー マンフレート・ハウスマン	波紋 森の学級 ハーモニカを持ったアーベル	前田敏作	原田ミナミ
第8巻 1958.5.25発行 第18回配本	ドイツ編 2	赤穴桂子 赤穴宏	ハインリヒ・シュベル ハンス・フランク	小都会の悪童たち ふたりのアフリカ探検家 われを忘れて (グスタフ・ナハティガル) 決意はすく (G・シュヴァインフルト)	植田敏郎 角信雄・小川 超 植田敏郎 高橋健二 山口四郎	伊藤好一郎 赤穴桂子 赤穴宏 赤穴宏 赤穴宏
第9巻 1957.4.20発行 第5回配本	ロシア編	ワルワラ・ フブノワ 玉置正敏	アレクサンドル・A・フ ジェエフ アルカージー・P・ガイダル レフ・カッシーリ ドミートリイ・V・グリゴ ローヴァイチ フョードル・M・ドストエフ スキイ	若き親衛隊 チャークとゲーク 勇士の弟 サーカスの少年 小さな英雄	黒田辰男 袋一平 岩上順一 米川和夫 井上満	原書挿絵 原書挿絵 V・フブノワ 玉置正敏 玉置正敏
第10巻 1957.11.25発行 第12回配本	諸国編1	金子三蔵	モルナール・フェレンツ ヨハン・ルーデルフ・ウィース	パール街の少年団 スイスのロビンソン	宇野利泰 白井健三郎	原書挿絵 原書挿絵
第11巻 1958.4.25発行 第17回配本	諸国編2	金子三蔵 吉井忠	ビョンスチェルネ・ビョ ルンソン サカリ・トペリウス カレル・チャペック エリン・ベリン ボレスラフ・ブルス バラージェュー・ペーラ	楽しい少年 フィンランド短編 ダーシェンカ ブルガリア短編 少女アネーリカ ほんとうの空色 中国新児童文学集 ☆小説	植田敏郎 万沢まき 小松太郎 志村三三子 小沼文彦 徳永康元	金子三蔵 金子三蔵 原書挿絵 吉井忠 吉井忠 金子三蔵
第12巻 1957.6.20発行 第7回配本	東洋編	久米安一 吉田重郎	白小文	消えたかばん	倉石武四郎	久米安一

巻 数	内 容	口 絵	作 家 名	作 品 名	訳 者	挿 絵	備 考
第13巻 1958.3.20発行 第16回配本			康濯	組合員君	倉石武四郎 以下同	久米宏一 以下同	
			任大星	はくべの珠			
			蕭平	海べの子ども			
			任大霖	こおろぎ			
			李惠薪	当番			
第14巻 1957.1.30発行 第2回配本			王若望	フーちゃんの宝さがし	倉石武四郎 同	吉田重郎 同	
			魏金枝	早いはどい			
			杲向真	シヤオパンとシヤオソン			
			張有徳	五点			
			阮章競	☆詩			
第15巻 1957.8.20発行 第9回配本			熊鷹声	金色のさざえ	倉石武四郎 同	吉田重郎 同	
			陳伯吹	よめなの花			
			包蕾	☆童話			
			嚴文井	空をとほうとしたねこ			
			張天翼	人まねインコ			
第16巻 1958.3.20発行 第10回配本			阿部知二	大いばりの子ねこたち	倉石武四郎 同	吉田重郎 同	
			吉屋信子	☆劇			
			川端康成	おおかみと三人のきょうだい			
			阿部知二	現代少年少女小説集			
			阿部知二	花物語			
第17巻 1958.3.20発行 第11回配本			阿部知二	万葉姉妹	倉石武四郎 同	吉田重郎 同	
			阿部知二	新聞小僧			
			阿部知二	トルメス川のラサリリー物語			
			阿部知二	愉快なタルタラン			
			阿部知二	トラングル氏の冒険			
第18巻 1958.3.20発行 第12回配本			阿部知二	ホルメス探偵	倉石武四郎 同	吉田重郎 同	
			阿部知二	ぎつつのの鍛冶屋とのみ			
			阿部知二	少年時代			
			阿部知二	電線の鳥たち			
			阿部知二	マンズフィードの日記			
第19巻 1958.3.20発行 第13回配本			阿部知二	思い出	倉石武四郎 同	吉田重郎 同	
			阿部知二	思い出			
			阿部知二	思い出			
			阿部知二	思い出			
			阿部知二	思い出			

第16巻 1958.1.30発行 第14回配本	冒険小説 集	油野誠一 鉄指公蔵	ジョルジュ・デュアメル ウィリアム・ヘンリー・ハド スン ハンス・クリスチャン・アン デルセン ヘルマン・ヘッセ ピエール・ロチ ジュール・ルナール ロバート・ルイス・スティー ヴン マリ・バシクルツェフ フランシス・ジャム シャルル＝ルイ・フィリップ エミール・ジャザエル 同 ハンス・カロッサ フリードリヒ・シュナック ユウジェニ・ド・グラン リチャード・ジェフリス ミシェル・ド・モンテーニユ ジェームズ・フエニモア・ クーバー ラディヤード・キップリング ジョン・メイシー ハーバート・ジョージ・ウェ ルス	オランダ組曲 鳥物語 生いたちの記 絵本 秋の日本風景 ルナールの日記 音楽家の手紙 シューマン ベートーヴェン モーツァルト ろばさんよ お元気で バシクルツェフの日記 野うさぎ物語 母への手紙 シャンペリーとボナザヴォー プラン・スリジェのぶどう小屋 ルーマニア日記 ちやうの生活 ゲランの日記 聖グウィードウ 旅日記 モヒカン族の最後 放浪児キム 世界文学物語 世界文化史物語語	尾崎喜八 田中清光 大畑末吉 尾崎喜八 一羽昌子 窪田毅弥 窪田海彦 伊藤喜八 尾崎喜八 吉村博次 吉村博次 串田孫一 伊藤海彦 串田孫一 大久保康雄 田中西二郎 福原麟太郎 原随園	松田正久 松田正久 山田美年子 山田美年子 山田美年子 松田正久 山田美年子 松田正久 松田正久 山田美年子 松田正久 山田美年子 松田正久 原書挿絵 山田美年子 山田美年子 山田美年子
第17巻 1957.12.25発行 第13回配本	世界文学 物語語	文学者の肖像				
第18巻 1957.10.20発行 第11回配本	世界文化 史物語語	丹下富士男 世界情勢地 図				丹下富士男

【附録2】

小さな李の靴

阿部 日奈子

あの子はここにはおりません
けさ早くに出ていったんでございます
さあ今ごろは、初夏^{はつなつ}の気流に促されてどこまで行きましたことやら
紙の帽子に霞網の服、草の鞆を斜めにかけて、足には李^{すもも}の皮の靴
朝露を踏むあの子の可愛い足は
李三個分の皮を接い^はで作った小さな靴にぴっちり包まれておりました
門を出るとすぐに小径をそれて
ナデシコ、マルバキキョウ、野バラ、スイカズラ、スグリ……
蜜に溢れた野育ちの花々が咲く六月^{まきば}の牧場を
ずんずん歩いていったんでございますよ

あの晩のことは、私どももよく憶えております
宴^{はしため}たけなわの大広間に忽然と現れたあの子は
台所ノ婢女ニ身ヲ嬖^{やつ}シタ天使ガ、愛ノ機略デー晩限り気高イ姫君ニ扮シタ
とでもいった風情でお目もじいたしましたでしょう
薔薇の微笑みの合間にする慎み深い受け答え、森の牝鹿を思わせるしとやかな身のこなし
(真実うぶな娘だとあはまいません、あの子ときたら淫らなまでに楚々として)
ガラスの舞踏靴が音もたてずに磨かれた床の上を滑りだしますと
あの子は誰の目にも妙なる調べでございました、気化する宝石でございました
(好きな男の合図ひとつで納屋の二階から飛び降りて、かすり傷ひとつ負わない身軽さで
すもの)
ふるえて、またたいて、燃え上がって
あの子はその場に居合わせた皆様がたを楽しませ、あの子自身も恍惚として
身分の高いお歴々からねんごろにさせていただいて
満悦至極でございました
さながら一個の巨大な悪ふざけに変わり果てたカドリーユ^{カレー}の方陣では
あの子の聞こえない哄笑が高らかにこだましていたのでございます

ところが何を勘違いなさったか
あなた様がそれはもう気違いのようにあの子を愛されて
探し探してとうとう町はずれの田舎家までいらっしゃった

国じゅうに放たれた密偵たちの包囲の網が狭められてゆくひと月のあいだ

あの子はいらいらと不機嫌を爆発させて

鳥屋の鶏を蹴飛ばし蹴飛ばし、日に百個も卵を踏みつぶしておりました

——あの子はきつと来る、逸る気持ちをおさえかね、情交の礼儀もわきまえず、ガラスの靴を後生大事におん自らお出ましになる、ああどうしたらいいの、本当に困ったわ、私がいけないことを知ったら、あの子は蒼白になってぼろぼろ涙を流すでしょう、そここの長椅子に身を投げて誰憚ることなく声を張りあげて泣くかもしれない、目の及ぶところ百里、麦の畑に働く百姓たちはみな一人残らずあの子の号泣を聞くのだわ、ああ口惜しい、いやになる、この私は二十歳になるやならずで情のない女と風評を立てられて、男たらしの汚名を着るのね

今まであの子の大っぴらな恋愛に煮え湯を飲まされてきた二人の姉たちは

ここぞとばかりお説教を垂れて溜飲を下げてたんでございますよ

——本当にね、どうしたらよいでしょう、都の噂では、あの方は夜会の晩を境に犬や鷹を使う狩もおいや、お芝居もおいや、祝祭式典にもお出にならず、つのるのはやるせなさばかり、もし明日にでもここにいらして、愛しい面影を取り逃がしたことをお知りになったら、いよいよもって料理番の心づくしのスワンネック・ブディングさえ喉を通らなくなり、みるみる痩せておしまいになるでしょう、妹よ、よく覚えておきなさい、世間知らずの若君が崇高な子供としてする初めての恋は、命取りになることがあるのですよ

姉娘二人のうっぶん晴らしがすんだところで、この私がおもむろに口を開き

あの子に助け舟を出してやりました

——そうだね、善き両親に育てられた花のようなひと粒種の若様は、感じやすくていらっしゃるからね、たんとお泣きになるかもしれない、でもどうだろう、世間というのは面の皮の厚いものでね、若様がいつまでも悲嘆にくれていらっしゃるのを見ると、そのお悲しみはいかばかりかと思うより、むしろこう考えるものなんだよ、これほど身も世もなくむせび泣いていらっしゃるからには、お嘆きもそう長くは続くまい、ご本心では水蛇女に魂をすなどられた苦しみを、早いところ忘れたがっていらっしゃる、早くお忘れになりたくて、それでああまで大粒の涙をおこぼしになるのだ、とね

あの子のほっとした顔……そこでもうひと押しいたしました

あなた様の古いお家柄を物語る楯形紋章やご格言を持ち出しましてね

——それにほら、これをごらん、若様のおうちのご格言、栄えある一族の方々がかつて誰一人として悖ることのなかった厳肅なご家訓は「本分をつくせ」でいらっしゃる、たとい若様が今しばらくは取り逃がした夜啼鶯を忘れかね、さめさめ泣かれるとしても、それで双の眸が涙に溶けておしまいになることはあるまい、それどころかあの方は、悲哀の淵を底まで浚いつくされたそのあかつきには、ガラスの靴に頬摺りして涙にくれた無邪気な子供を決然と屠られて、ご自身の愚図を潔く清算なさり、次からはどなたとも、出会ったその晩にお心おきなく固くお契りあそばすことだろうよ

そうなんでございますよ、私どもはみな
あなた様をご本分に立ち返られて品位の保てるご縁組をなさり
立派なご家系の面目を遺憾なく施されますよう
心から望んでいるのでございます
だってほら、あなた様のお血筋が絶えますのは、江湖の禍いでございますもの

さあさ、そろそろ涙を拭いてお顔を上げてくださいまし
屋根裏部屋にご案内いたしましょうね
椅子にのぼって天窓からのぞいてごらんあそばしますと
あの子の歩いていった牧場や畑や野や森が広がっております
紙の帽子に霞網の服、草の鞆を斜めにかけて、足には李の皮の靴
あれは決して道づたいには行かない子でございました
陽炎の野原をつきつて蜃気楼の森の奥深く、李の靴は歩いていったのでございます
世界のはずれまで行くつもり、独身者の仮借ない足取り……
ふるえて、またたいて、燃え上がって
死者のように晴れやかな足取りで

『典雅ないきどおり』所収（書肆山田、1994年）